



## 小杉左官の名工（鏝絵）

竹内 源造 (1886~1942)

竹内源造は、小杉左官として県内各地の左官工事に携わった竹内組五代目の竹内勤吉の五男として、明治19年（1886）、射水郡小杉三ヶ村（現射水市三ヶ）に生まれた。竹内家は、江戸時代後期の文政年間に活躍した初代勤兵衛以来、左官職人の家系であった。父や家業を継いだ兄たちの姿を見て左官業を志し、小学校卒業と同時に左官職人になった源造は、明治34年（1901）、15歳で初代東京帝国ホテル貴賓室の漆喰彫刻を仕上げるなど、若い頃から才能を発揮し、明治44年（1911）には、25歳で射水郡役所から「一級漆喰彫刻士」として認定された。

大正5年（1916）、父勤吉が没すると竹内組を引き継ぎ、富山県西部を中心に、寺社・土蔵・銀行・公共建築など多くの左官仕事を手掛けた。客の注文に応じて鏝絵と呼ばれる漆喰彫刻を施した。

源造は、寺社建築の蛙股や雲形、懸魚などの装飾物の図解が書かれている「諸職絵様雛型」をはじめ、和風の人物画が描かれている本や現在の動物図鑑のような本を参考して鏝絵を製作した。また、50枚あまりの日本国内や世界の地図を持っていた源造は、富山県内だけではなく世界に目を向け、大正8年（1919）には、弟子や仲間20人余りを引き連れて海を渡り、現在も中国大連市にある旧朝鮮銀行大連支店の建築に携わった。この建物は現在、中国工商银行中山広場支店となっており、大連市重点保存建築に指定されている。

源造は、面倒見が良かった反面、職人氣質が強く、弟子たちにも肝心な技術はなかなか教えることがなかった。また、思い通りに仕上がらなかった作品を何度も何度も打ち壊したという。漆喰彫刻だけでなく普通の壁塗りの仕事においても、4人分の仕事を1人で仕上げるほどの腕前であったと伝えられている。

源造作品の魅力は、何と言ってもその迫力にある。名越家（砺波市宮森新）の土蔵軒下の二頭の龍と波しぶきはその代表作である。日本最大級の長さ18m、高さ1mの白壁に、龍と龍が凄まじい迫力で対峙している。土蔵を飾るのは龍だけでなく、鳥や松、花を施し、基礎部分はわざと石に似せた模様仕上げるといった造形で、当時の最高の技術が示されている。また、塗厚を1.5cmぐらいにして乾燥するたびに3回から6回ほど重ねて塗り、龍の鱗も一枚一枚隆起させて装っている。手間を惜しまないこの土蔵の鏝絵は、およそ数年かけて仕上げたものと考えられている。壁から60cm余りも飛び出た旧小杉町役場庁舎（現竹内源造記念館）の「鳳凰」など、「絵」というよりも「彫刻」に近い立体的な造形となっている。源造作品の多くは、目にガラス片や電球などを仕込んだ玉眼としている。また、射水市大江の永森神社にあるニューカレドニアからの帰還者が奉納した絵馬には、彼らが持ち帰ったニッケル鋼を埋め込むなど、技術的に優れるだけでなく、斬新な発想に富んだ作品を多く残している。

源造は、裕福ではないにもかかわらず20人を超える弟子を抱え育て、旅人が訪ねてくると腹いっぱい食事をさせ、誰でも家に寝泊まりさせるような人情味の厚い人物でもあった。

昭和17年（1942）5月12日、外出先から帰宅するなり脳溢血で倒れ、半日後に逝去した。享年56歳。

## 平成27年度も引き続き顕彰される郷土先賢者



### 自由民権運動の先覚者

稲垣 示 (1849~1902)

稲垣示は、嘉永2年（1849）、射水郡棚田村（現射水市棚田）の豪農稲垣又平の長男として生まれる。14歳で金沢藩校壮猶館へ入り、19歳には小杉郡奉行所指揮官射水大隊司令官となった。「支配なき後は有力農民や商人から選ばれた有志が、維新期の行政を担わねばならない。そのためにはまず学問を修め、新しい時代の方向を知らねばならない」と考え、高岡の野上文山に入塾、一時は小学校教員となるがほどなく父病気のため家業を継ぐこととなり、寺子屋教師を傍らに自由民権運動の同志と糾合し、率先して政界に身を投じていくことになった。

明治12年（1879）板垣退助の民権運動に呼応し、「人民に自由の何たるかを知らせ、天から与えられた権利に目覚めさせることが何よりの急務である」と遊説した。翌13年、「北立社」を結成し、各県からの国会開設の請願が却下される中、4度、太政大臣の手に渡すように迫った。この熱意は他県の有志にも知られるところとなり「越中の自由は射水の森より」と言われるようになった。明治15年（1882）「北立自由党」を結成し、「北陸日報」「自由新論」「自由新誌」を発刊したが、明治新政府によって弾圧され廃刊となる。明治16年（1883）、高岡瑞龍寺で北陸7州有志大懇親会を開催したが、官憲の弾圧は厳しさを増し北立自由党は解党、明治18年（1885）には大阪事件で逮捕され、禁固5年の刑に服した。憲法発布の大赦により出獄後、「北陸公論」を刊行、明治27年（1894）第2回衆議院選挙に出馬し最高点で当選、第3回にも当選した。また、田中正造の足尾銅山公害糾弾の応援をしたり、「普通選挙期成同盟」を共同で結成したりと活躍の場は全国に広がっていった。

明治35年（1902）第7回衆議院選挙投票日前日、応援演説後めまいに襲われ急逝した。自由民権運動の先駆者、享年53歳だった。